

詩歌・小説の中のはきもの (第12回)

大塚製靴株式会社社友 渡 辺 陸

122 彼は僕が今までつけてみたことがない
沢山の革を僕の靴につけようとするが
それでは裸の踵の
欲求を絶望させる
彼の不屈の金槌は
靴底に愚弄の釘をうちつけて
どこかへ流離 (さすら) う望みを
くぎづけにする

マラルメ

★『靴直し (西脇順三郎訳)』の一節。マラルメは「この善良な靴修繕人より百合が好きだ」という。人と花と比べるのが詩人たる所以かも知れないが、大抵の靴職人はこのような大袈裟なことはしていない。「前掛けに靴職人は児を抱けり 緒き児の髪が光る日向 真鍋美恵子」というような小さな幸福に満ち足りて作業をしている。私の知っている限りは。

123 靴屋のシモンは、ある時こんなことを言った。
「オレがまだジャリの時によ、親父とおふくろがケンカしてな、親父はオレに靴屋を継がせてえし、おふくろはオレを洋服屋にしてえってんで、すったもんだのあげくの果てに親父が勝ったんだ。今考えりゃ親父はありがてえ。洋服屋になってたら今頃飢え死にだア。だって靴屋をやって30年、一度だって洋服の注文が来たためしはねえんだから」

★『ユダヤジョーク ジャック・ハルペン

編』から。「ハッピー・シュー・イヤー」とか「ソコが自慢」、「通勤快足」などというのには愛敬もありいいのですが、「クツろげるクツ店」とか「最新技術のシュー大成」、「クツのシュー繕屋」、「創業十シュー年」なんてなりますと、見るのも聞いているのもいささかクツで、それが二番煎じになると少しハキ気を催したり、シュー態に気づいてないなあ、もうちょっと靴業にシュー念を燃やして真面目にやらないとお客様はマンゾクしてくれないぞと心配になります。

124 子どものときから、なるべくはだしで大地を踏ませる習慣をつけさせることはたいせつです。足指でふんばるからすべらない。足指の鍛錬になるということだけではありません。私どもは手や足を運動器官だと思ひこんでいますが、手や足は同時に、感覚器官でもあるのです。大地をはだしで踏んだときの触覚・圧覚などは、足の皮膚・筋肉・腱などにある感覚の受容器をとおして中枢神経に伝えられ、この情報は脳の運動野から調整の再命令として足の筋肉に送られてきて、足の運動はうまくつづけられるわけです。

近藤四郎

★『足のはたらきと子どもの成長』から。京都大学霊長類研究所の元所長であった近藤博士は「足」研究の第一人者だった。若い女性に人気のある、^{ひょういつ}飄逸で、純粋な方で

あった。あるとき、私の親方と製靴技術に関する見解を異にして「あなたの親方は馬鹿だねえ」「今頃馬鹿だと気づく先生も相当な……」「いや、あれほどの馬鹿だとは知らなかったんだ」。私の親方は近藤博士の指導で博士号を取得している。私が「バカセ」と呼んでいる人たちは、実際子供みたいな人が多くて、そのくせ、時たまいいことを言うので本当に困る。

125 十五夜に買ったれば「名月」と
名づけて嬉しジョギングシューズ
石川義倫

★『朝日歌壇』から。サツキ展や菊花展に行くと、丹精を込めて育てた鉢植えの作品に「雄飛」とか「波濤」などと美称がつけられている。製造会社が育てたブランド名も大切だが、顧客が購入したら靴は顧客のもの、「名月」と名付けようが「新月」と名付けようが自由である。愛称をつけられた靴は幸せである。こういう楽しみ方のあることを知っておきたい。

126 街の靴屋さんに入る。中国は靴の歴史が長い分、デザインも質も色も、なかなかスグレモノである。しかし、銀座の高級靴店を想像してはいけない。ぴかぴかに磨かれ、新しい革の匂いを発する美しい靴は、庶民の店には存在しない。それどころか、試し履きされつくして、型崩れし、埃まみれで、光沢を失った「古靴」が、しかも片方だけ、棚にずらっとならんでいる。

青樹明子

★『日中ビジネス摩擦』（2003年刊）から。04年11月、中国へ行った。広州・桂林・昆明の庶民は余りいい靴は履いていなかった。昆明に立派な靴店があったが、バスの窓から見るかぎり雲南省の靴店は小さなものばかりだった。ここに書かれた片足だけのディスプレイは万引きを恐れてのことで

ある。注文すれば光り輝く靴が出てくる。性悪説、他人を安易に信用しないのが中国式だと中国で3年暮らした著者は言う。

127 日本のビジネスマンにのみ異様に愛されている、ソフトモカシン（コギヤル用語で言うところのギョウザ靴）は、ビジネスの場には向かない。また、コンフォートシューズなどは足の健康を考える人や、長時間立ち仕事をする人には欠かせない物であるが、フォーマルのときにはお薦めできない。

石津謙介

★『男たちへの遺言』から。「正統派の靴を愛用すべし」が42番目の遺言になっている。正統を知らないで、いきなり革新派になったり、異端や前衛を気取るから底の浅いお洒落になってしまう。「オレ流」が通用するのは百人に一人と思って、石津さんの話に耳を傾けたい。

128 我々の精神が肉体に敗亡している証拠を私は示すことができる。

それはスリッパ・サンダルである。

スリッパ・サンダルというのは肉体の安楽に奉仕しながら同時に精神を蝕む、精神サイドからするとげに怖ろしい存在なのである。

町田 康

★『テスト・オブ・苦虫』から。スリッパ・サンダルが持つ、著者言うところの“だらだら力”に恐怖しているのだが、裏を返せばそれだけ緊張感を解く力を持っているのがスリッパである。どんな態度で履くのが問題なのだ。もともと気合を入れないで履くべきスリッパ・サンダルに緊張感を抱いて「履く」のはナンセンスである。スリッパに限らず履物は履くもので、「履物に履かれてしまう」とロクなことにならない。場合によっては、履物に対しても“鈍感力”が必要である。